日蓮大聖人御書全集

上野殿御書（うえのどのごしょ）

（七郎五郎死去の事（しちろうごろうしきょのこと））

新版
1903
〜
1904

上野殿御書（七郎五郎死去の事）

弘安3年('80) 9月6日　59歳　南条時光

南条七郎五郎殿の御死去の御事、人は生まれて死するならいとは、智者も愚者も上下一同に知って候えば、始めてなげくべしおどろくべしとはおぼえぬよし、我も存じ、人にもおしえ候えども、時にあたりて、ゆめかまぼろしか、いまだわきまえがたく候。まして、母のいかんがなげかれ候らん。

父母にも兄弟にもおくれはてて、いとおしきおとこにす

ぎわかれたりしかども、子どもあまたおわしませば、心
なぐさみてこそおわしつらん。いとおしきてこご、しかも
おのこご。みめかたちも人にすぐれ、心もかいがいしくみ
えしかば、よその人々もすずしくこそみ候いしに、あやな
く、つぼめる花の風にしぼみ、満月のにわかに失せたるが
ごとくこそおぼすらめ。まこととともおぼえ候わねば、かき
つくるそらもおぼえ候わず。またまた申すべし。恐々
謹言。

弘安三年九月六日

日蓮　花押

上野殿御返事

追って申す。

この六月十五日に見奉り候いしに、「あわれ、肝ある者かな。男や、男や」と見候いしに、また見候わざらんことこそかなしくは候え。さは候えども、釈迦仏・法華経に身を入れて候いしかば、臨終めでたく候いけり。心は父君と一所に霊山浄土に参りて、手をとり頭を合わせてこそ悦ばれ候らめ。あわれなり、あわれなり。